HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学における全学インターンシップの特徴と課題 ： 参加学生アンケート調査結果分析（2014 年度）
Author(s)	亀野, 淳
Citation	高等教育ジャーナル ： 高等教育と生涯学習, 22, 133-141
Issue Date	2015-03
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.22.133
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61077
Type	departmental bulletin paper
File Information	No2213.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

The Characteristics and Some Issues of Internship at Hokkaido University
Results of Questionnaires about Internship for Hokkaido University Students in 2014

Jun Kameno*

Institute for the Advancement of Higher Education, Hokkaido University

北海道大学における全学インターンシップの特徴と課題
―参加学生アンケート調査結果分析(2014 年度)―

亀 野　淳 **

北海道大学高等教育推進機構

Abstract ― This report is based on the results of a survey taken by students from Hokkaido University after participating in an internship ― and explains the common characteristics and issues involved.

The following points summarize the common characteristics seen in the survey results:
1. Internship length: A high number of students felt the number of days their internships consisted of was suitable. However, there were quite a few students who thought their 5 day internships were a bit short and quite a few who thought their 10 day internships were a bit long. 2. Effectiveness of individual interview/hypothesis creation process: Evaluations of this were generally high, but evaluations from graduate students were slightly lower. 3.Tangible effects of the internship: The statements “this internship allowed me to know about the industry in which I wish to find work,” “this internship allowed me to find the areas in which I must improve through life experience,” and “this internship allowed me to know what it actually means to ‘work’ as a member of society” were highly agreed with by students. 4. Generally, students reported a high level of satisfaction with their internships. It appears a high connection between the internship and the student’s major or the internship taking place in the student’s actual desired field/business raised student satisfaction.

(Accepted on 11 March, 2015)

*) Correspondence: Institute for the Advancement of Higher Education, Hokkaido University, Sapporo 060-0817, Japan
E-mail: jkameno@high.hokudai.ac.jp

**) 連絡先：060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目 北海道大学高等教育推進機構

1．北海道大学における全学インターンシップの概要と 2014 年度の参加状況

1.1　北海道大学における全学インターンシップの概要

北海道大学では，2004 年度より，インターンシップを全学教育の正課科目として位置づけて実施している。同インターンシップの目的としては，①自らの専攻や将来のキャリアに関連した就業体験による高い職業意識の育成，②実社会に触れることによる学習意欲の向上，③大学院においては，専攻に関連したより高度な実務の体験の３つがあげられている(『北海道大学学生委員会インターンシップ専門委員会報告』(2003 年))。詳細な用語の相違はあるものの，多くの大学では，①及び②を目的としているものが多い。しかしながら，研究大学という特性上，大学院生が多く，③をあえて目的の一つとしてあげているのが特徴である。

北海道大学におけるインターンシップとしては，表１のように，全学インターンシップと各学部・学院・研究科のインターンシップの２本建てで実施している[1)]。

毎年度ほぼ表２のスケジュールで実施している。なお，単位には認定しないものの，冬休みや春休みに実施しているものもある。

全学インターンシップにおける学生への指導は事前研修が中心であり，これについては，全学インターンシップの担当教員である高等教育推進機構の専任教員（筆者）が担当している。

マッチングの成立によりインターンシップの実習先が決定した学生に対して事前指導を実施している。具体的には，７月にかけて計３回実施しているが，学期中であることから多くの学生は，昼間に授業科目が入っているので，夜の時間帯も事前指導をセットしている。内容については，①手続きや心構え，②実習先企業等研究の方法，③実習先企業等との事前調整，④仮説の設定，⑤個人面接でなどある。

仮説設定については，漫然とインターンシップに参加するのではなく，よりインターンシップの効果を上げることを目的に実施している。具体的には，仮説を事前に設定し，実習期間中にその仮説を検証させるという作業を課している[2)]。

表１．北海道大学におけるインターンシップの概要

	全学インターンシップ	各学部・研究科・学院で実施しているインターンシップ（一部の学部・研究科・学院のみ）
対象	学部・研究科・学院，学年を問わず本学学部生・院生	原則として，当該学部・研究科・学院に所属する学生・院生
担当	高等教育推進機構とキャリアセンター	各学部(学科)，研究科・学院(専攻) の担当教職員
単位	平成 16 年度より全学教育科目の正課として実施(２単位または１単位)	各学部，研究科，学院の単位
内容	８～９月に２週間程度の就業体験が中心	各学部(学科)，研究科・学院(専攻) の専門に基づいたインターンシップ

表２．全学インターンシップのスケジュール

４月中旬：	全学インターンシップに関する学内説明会開催
４月下旬：	参加申込
５月上旬：	参加目的レポート(エントリーシート) の提出
５～６月：	企業と学生のマッチング
７月：	事前研修(３回程度)
８～９月：	インターンシップの実施
インターンシップ終了後：研修成果レポートの提出，アンケート調査の実施	

また，全学インターンシップの場合，学年，学部・研究科・学院，目的等も一様でないことから，一律に学生を指導することが困難であるので学生各々に仮説を設定させ，これを個人面接などで確認・修正を行っている。この点に関しても全学インターンシップが多様なインターンシップであることとも関係している。

1.2　2014 年度実績について

2014 年度の学部・研究科（学院），学年別の参加者数は表 3 のとおりであるが，2013 年度の 150 名を大幅に上回る 211 名が参加した。なお，2014 年度からは，新渡戸カレッジの学生計 10 名の参加があった。

2．アンケート調査結果

2.1　アンケート概要

本稿で分析を行うアンケート調査は，全学インターンシップ参加学生全員（211 名）に対し，2014 年 9 月 19 日に電子メールで回答を依頼し，同年 10 月 9 日締切で電子メールによって回収したものである。回収数は 109，有効回答率は 51.7％であった。

調査項目は，インターンシップの参加目的，日数についての考え，事前研修の状況，インターンシップの中身，効果，満足度などである。

表 3．2014 年度全学インターンシップ参加者数

①学部

		学年				
		1 年	2 年	3 年	4 年以上	計
学部	文学部	0	2	15	2	19
	教育学部	0	0	3	0	3
	法学部	1	2(1)	21	0	24(1)
	経済学部	0	9(4)	42	1	52(4)
	理学部	0	1	7	1	9
	薬学部	0	3	1	0	4
	工学部	3	3(1)	27	0	33(1)
	農学部	0	5(2)	11	3	19(2)
	水産学部	0	1(1)	4	0	5(1)
	総合文系	1(1)	0	0	0	1(1)
	総合理系	2	0	0	0	2
計		7(1)	26(9)	131	7	171(10)

（　）内は新渡戸カレッジの学生で内数

②大学院

		課程・学年		
		修士 1 年	修士 2 年	計
研究科・学院	文学研究科	1	0	1
	教育学院	2	0	2
	経済学研究科	1	1	2
	理学院	7	0	7
	農学院	14	0	14
	環境科学院	5	0	5
	生命科学院	6	0	6
	総合化学院	3	0	3
計		39	1	40

2.2　アンケート分析結果

本稿では，実施したアンケート調査結果をもとに，日数についての考え方，事前研修の効果，具体的な効果，全体の満足度などについて，専攻別（文系・理系），課程別（学部・大学院），性別，受入部署別（１つの部署か複数の部署か），専門分野との関連性，実働日数との関係性に留意しながら分析を行った。専攻別（文系・理系），課程別（学部・大学院），性別，受入部署別，専門分野との関連性，実働日数の分布は表４～表６のとおりである。

2.2.1　日数についての考え方

実働日数は１週間（実働５日間）と２週間（実働10日間）が中心であるが，実働日数に対する感想をみると，全ての実働日数で「適当だった」が過半数を占めており，「短かった」が２～３割程度を占めている。ただし，「～５日」では「短かった」が，「10日」では「長かった」がやや多くなっている（図1）。

同様に，適当だと思う日数についても，全体では，「５日程度」が約半数，「10日程度」が約３割を占めているが，実働日数との関係でみると，「～５日」では「５日程度」が，「10日」では「10日程度」

表４．属性，受入部署別回答数，回答割合

		回答数	%
専攻別	文系	44	40.4%
	理系	65	59.6%
課程別	学部	81	74.3%
	大学院	28	25.7%
性別	男性	61	56.0%
	女性	48	44.0%
受入部署	１つ	59	54.1%
	複数	47	43.1%
	無回答	3	2.8%
合計		109	100.0%

（注）受入部署については，以下のとおり。
「１つ」＝「実習先企業では，一つの部署のみでの実習だった。（例えば総務課のみで実習）」
「複数」＝「実習先企業では，複数の部署での実習だった。（例えば総務課と営業課で実習）」

表５．実働日数別回答数，回答割合

	回答数	%
～５日	64	58.7%
６～９日	13	11.9%
10日	26	23.9%
11日以上	6	5.5%
合計	109	100.0%

表６．専門分野との関連性別回答数，回答割合

	回答数	%
大いに関連がある	23	21.1
やや関連がある	42	38.5
どちらともいえない	11	10.1
あまり関連がない	18	16.5
全く関連がない	15	13.8
合計	109	100.0

が最も多くなっている（表７）。つまり，自ら体験したインターンシップの日数を適当であると認識している割合が最も多くなっている。

2.2.2　個人面接，仮説設定について

個人面接，仮説設定とも約６～７割が「大変効果があった」「やや効果があった」と回答している。

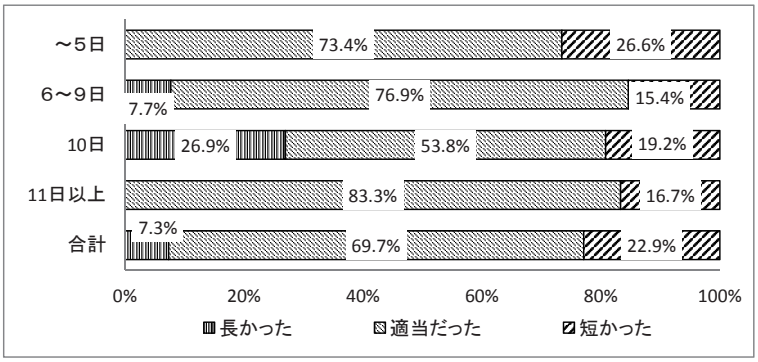


図１．実働日数に対する感想（実働日数別）

表７．実働日数と適当だと思う日数の関係

		適当だと思う日数				
		5 日程度	10 日程度	15 日程度	20 日程度	30 日以上
実働日数	～５日	71.9%	18.8%	6.3%	1.6%	1.6%
	６～９日	36.4%	45.5%	9.1%	9.1%	0.0%
	10 日	28.0%	52.0%	8.0%	12.0%	0.0%
	11 日以上	0.0%	16.7%	16.7%	0.0%	66.7%
	合計	53.8%	29.2%	7.5%	4.7%	4.7%

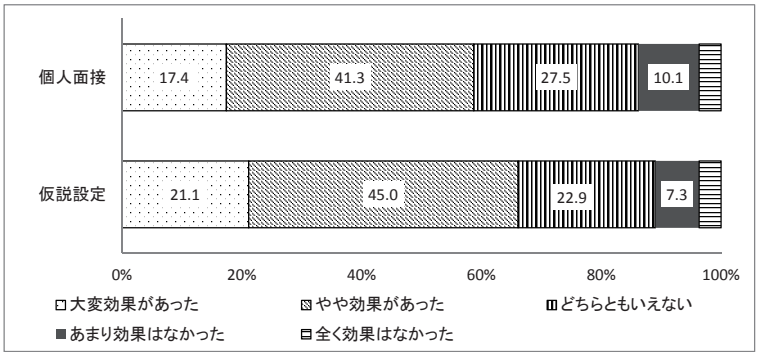


図２．個人面接，仮説設定の効果

表８．個人面接，仮説設定の効果（属性別）

	全体	専攻別		課程別		性別	
		文系	理系	学部	大学院	男性	女性
個人面接	3.59	3.68	3.52	3.72	3.21*	3.51	3.69
仮説設定	3.72	3.66	3.77	3.80	3.50	3.64	3.83

(注)数値は(大変効果があった)=5,(やや効果があった)=4,(どちらとも言えない)=3,(あまり効果がなかった)＝2,(全く効果がなかった)＝1として算出した平均値

*: $p<0.05$

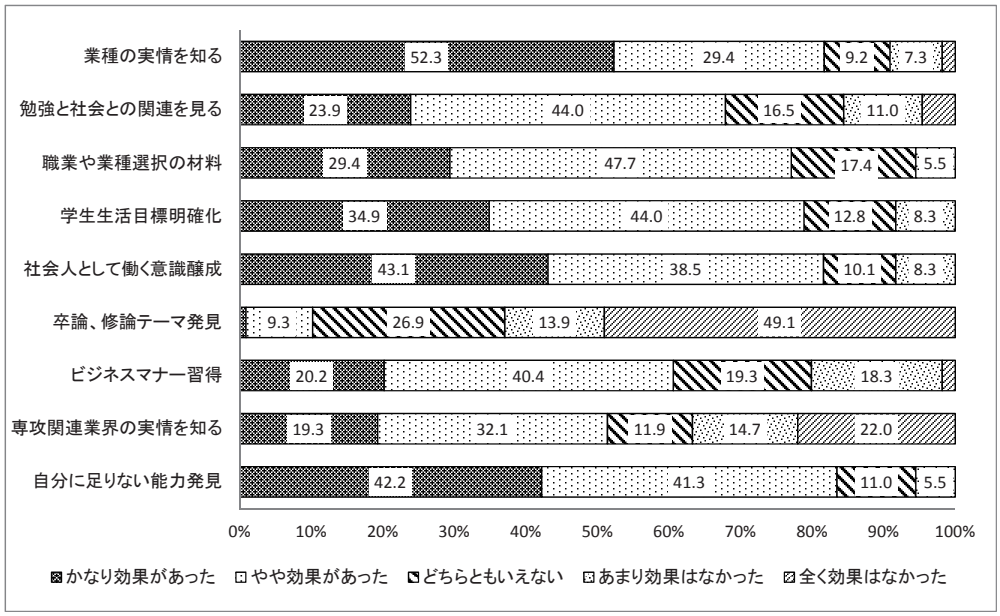
属性別に平均値の差をみると（t 検定），大きな差はみられないが，やや大学院の方が学部よりも効果に対する評価が低くなっている（図２，表８）。

2.2.3　具体的なインターンシップの効果

具体的なインターンシップの効果について５段階で評価した結果をみると，「卒論，修論のテーマをみつける」を除けば，そのほかの項目は半数以上が「かなり効果があった」「やや効果があった」と回答しており，おおむね高い効果を示している。特に，「就職希望である業種の実情を知る」「社会経験を通じて自分に足りない能力を見つける」「社会人として「働く」ということはどのようなことなのかを知る」では，「かなり効果があった」が４～５割を占め，高い効果があったと評価できる（図３）。

これを属性別に平均値の差をみると（t 検定），課程別，部署別では有意な差がみられる項目はなかった。性別では「自分がどういう職業や業種に向いているのかを選択する」がやや男性の方が高い効果がみられた。専攻別では，「ビジネスマナーを身につける」では文系の方が，「学校での勉強と実社会との関連性を見つける」では理系の方が高い効果がみられた（表９）。

また，実働日数及び専門分野との関連性（５段階）と具体的効果（５段階）との相関係数をみると，実働日数については，「今後の学生生活の目標を明確にする」では正の相関がみられたが，その他の項目では相関はみられなかった。一方，専門分野との関連性については，「学校での専攻分野に関連する業界の実情を知る」「卒論，修論のテーマをみつける」「学校での勉強と実社会との関連性を見つける」「就職希望である業種の実情を知る」と正の相関がみられた（表 10）。つまり，勉強と関係のある項目の効果を得るためには，専攻分野との関連性が重要であり，逆に，その他の項目は専攻分野との関連性とは関係なくとも一定の効果が得られるといえる。



（注）項目は以下のとおり。表 9，表 10 も同様
「業種の実情を知る」=「就職希望である業種の実情を知る」
「勉強と社会との関連を見る」=「学校での勉強と実社会との関連性を見つける」
「職業や業種選択の材料」=「自分がどういう職業や業種に向いているのかを選択する」
「学生生活目標明確化」=「今後の学生生活の目標を明確にする」
「社会人として働く意識醸成」=「社会人として「働く」ということはどのようなことなのかを知る」
「卒論，修論テーマ発見」=「卒論，修論のテーマをみつける」
「ビジネスマナー習得」=「ビジネスマナーを身につける」
「専攻関連業界の実情を知る」=「学校での専攻分野に関連する業界の実情を知る」
「自分に足りない能力発見」=「社会経験を通じて自分に足りない能力を見つける」

図３．具体的なインターンシップの効果

2.2.4　キャリア形成上の役立ち度と全体の満足度

キャリア形成上の役立ち度（今回のインターンシップが将来設計やキャリア設計に役立つと思うか）と全体の満足度について５段階で評価した結果をみると，キャリア形成上の役立ち度では，「大いに役立つ」49.1％，「役立つ」44.5％とこの両者を合わせると９割超となっている（図４）。また，全

表９．具体的なインターンシップの効果（属性別）

	全体	専攻別		課程別		性別		受入部署	
		文系	理系	学部	大学院	男性	女性	１つ	複数
業種の実情を知る	4.23	4.11	4.31	4.21	4.29	4.34	4.08	4.36	4.13
勉強と社会との関連を見る	3.72	3.34	3.97**	3.70	3.75	3.66	3.79	3.75	3.74
職業や業種選択の材料	4.01	4.14	3.92	4.00	4.04	4.13	3.85 †	4.03	4.04
学生生活目標明確化	4.06	4.07	4.05	4.02	4.14	4.05	4.06	4.08	4.04
社会人として働く意識醸成	4.17	4.07	4.23	4.12	4.29	4.26	4.04	4.24	4.15
卒論，修論テーマ発見	1.97	2.02	1.94	2.08	1.75	1.98	2.00	2.10	1.87
ビジネスマナー習得	3.59	3.91	3.37**	3.63	3.46	3.46	3.75	3.54	3.66
専攻関連業界の実情を知る	3.12	3.09	3.14	3.07	3.25	3.28	2.92	3.07	3.17
自分に足りない能力発見	4.20	4.27	4.15	4.17	4.29	4.15	4.27	4.19	4.23

(注) †: p<0.1, *: p<0.05, **: p<0.01

(注) 数値は（かなり効果があった）=5,（やや効果があった）=4,（どちらとも言えない）=3,（あまり効果がなかった）＝ 2,（全く効果がなかった）＝ 1 として算出した平均値

表 10．実働日数及び専門分野との関連性と具体的なインターンシップの効果（相関係数）

	日数	専門分野との関連性
業種の実情を知る	0.012	0.318 **
勉強と社会との関連を見る	0.140	0.402 ***
職業や業種選択の材料	0.150	−0.093
学生生活目標明確化	0.194 *	0.129
社会人として働く意識醸成	0.110	0.041
卒論，修論テーマ発見	0.000	0.528 ***
ビジネスマナー習得	0.133	−0.073
専攻関連業界の実情を知る	0.005	0.716 ***
自分に足りない能力発見	0.096	−0.094

(注) **: p<0.01, ***: p<0.001
数値は Spearman のロー

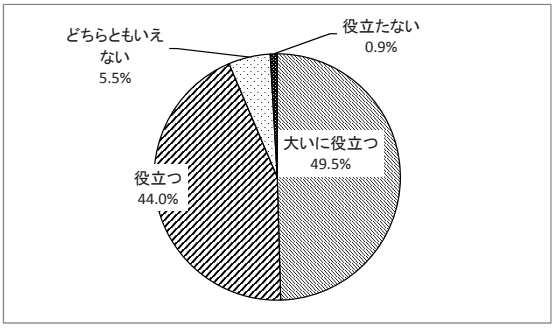


図４．キャリア形成上の役立ち度

体の満足度も「大いに満足」が 41.8%，「満足」が 51.8%とこの両者を合わせると 9 割超となっており，インターンシップに参加したほとんどの学生が満足しているといえる（図 5）。

これを属性別に平均値の差をみると（t 検定），大きな差はみられないが，「男性」「一つの部署で実施」の方が満足度でやや平均値が高くなっている。また，実働日数及び専攻との関連性との相関係数をみると，実働日数では相関がみられなかったが，専攻との関連性ではキャリア形成上の役立ち度，全体の満足度とも正の相関がみられた。つまり，専攻との関連性が強いほど，キャリア形成上の役立ち度，

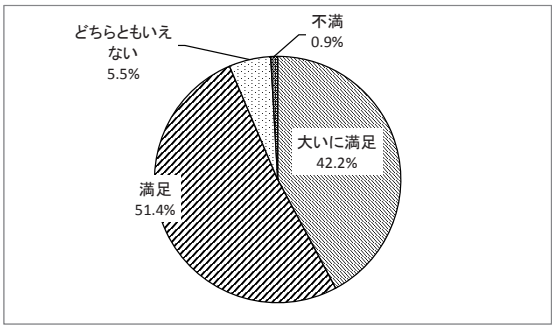


図 5．全体の満足度

表 11．キャリア形成上の役立ち度と全体の満足度（属性別）

	全体	専攻別		課程別		性別		受入部署	
		文系	理系	学部	大学院	男性	女性	1 つ	複数
キャリア形成役立ち度	4.42	4.45	4.40	4.43	4.39	4.48	4.35	4.49	4.40
全体の満足度	4.35	4.32	4.37	4.37	4.29	4.44	4.23 †	4.47	4.26 †

（注）数値は，キャリア形成上の役立ち度については，(大いに役立つ)=5，(役立つ)=4，(どちらとも言えない)=3，(役立たない)＝ 2，(全く役立たない)＝ 1 として算出した平均値。
全体の満足度については，(大いに満足)=5，(満足)=4，(どちらとも言えない)=3，(不満)＝ 2，(大いに不満)＝ 1 として算出した平均値。
表 12，13 も同様。
†: p<0.1

表 12．実働日数及び専攻との関連とキャリア形成上の役立ち度，全体の満足度との関係（相関係数）

	日数	専攻との関連
キャリア形成役立ち度	0.131	0.197 *
全体の満足度	0.028	0.238 *

（注）*: p<0.05
数値は Spearman のロー

表 13．希望業種，希望企業とキャリア形成上の役立ち度，全体の満足度との関係

	希望業種か否か		希望企業か否か	
	希望業種 (n=73)	希望業種ではない（どちらでもないを含む）(n=35)	希望企業 (n=54)	希望企業ではない（どちらでもないを含む）(n=22)
キャリア形成役立ち度	4.49	4.29	4.59	4.18 *
全体の満足度	4.45	4.14 *	4.57	4.14 **

（注）*: p<0.05, **: p<0.01

全体の満足度が高まるといえる（表 11，表 12）。

さらに，インターンシップ先が希望業種，希望企業であったかどうかによる平均値の差をみると（t 検定），希望業種，希望企業の方がキャリア形成上の役立ち度，全体の満足度が高くなっている（表 13）。

3．インターンシップ拡充のための課題

本報告では，2014 年度に北海道大学において全学インターンシップに参加した学生の事後アンケート調査結果をもとに，その特徴と課題を明らかにした。

特徴としては，以下の点があげられる。

①日数については，実際に参加した日数が適当であるとの認識が多いが，５日程度の場合はもう少し長期を期待する者，10 日程度の場合はもう少し短期を希望する者がやや多くなっている。

②個人面接・仮説設定の効果については，おおむね高い評価となっているが，大学院の学生の評価がやや低くなっている。

③具体的なインターンシップの効果については，特に，「就職希望である業種の実情を知る」「社会経験を通じて自分に足りない能力を見つける」「社会人として「働く」ということはどのようなことなのかを知る」などで高い効果があったと評価している。

④全般的に満足度は高いが，専攻との関連が強いほど，また，希望業種・企業であったほどより満足度は高くなっている。

こうした結果から，全学インターンシップの拡充に向けて，以下の取組が必要であるといえる。

第一に，本学のインターンシップの事前研修の特徴である個人面接・仮説設定については，現状では，大学院生も学部生とほぼ同様の対応をとっているが，大学院生に対するよりきめ細かな対応策を検討する必要がある。

第二に，専門分野との関連性が強いほど効果や満足度が高いものがみられたので，インターンシップ先の選定にあたっては，専門分野との関連性のある企業等にも留意するよう学生に対する指導を行う必要がある。

第三に，希望業種，希望企業である方が，満足度が有意に高くなっていることから，学生の希望にあったより多くのインターンシップ受入企業を開拓する必要がある。

参考文献

亀野淳（2004），「インターンシップ　新たなステージに向けた大学の役割－北海道地域及び北海道大学の事例をもとに－」，『大学と学生』平成 16 年第 3 号，9-17

亀野淳（2007），「国立大学におけるインターンシップの事例」，高良和武（監修）・石田宏之・太田和男・古閑博美・田中宣秀（編）『インターンシップとキャリア－産学連携教育の実証的研究－』，学文社

亀野淳（2009），「体験型インターンシップの役割の再検証と仮説の設定･検証による向上効果」,『日本インターンシップ研究年報』10，17-24

亀野淳（2010），「国立大学におけるキャリア教育の展開と課題－北海道大学の取組みを事例として－」，『生涯学習研究年報』12，25-43

注

1）北海道大学におけるインターンシップの概要については，亀野（2004），亀野（2007），亀野（2010）に詳しい。

2）仮説の設定についての詳細とその効果については，亀野（2009）において詳細に分析している。